

風

有森信二

風が
南京ハゼの葉を
吹き抜けると
いつせいに
あたりの信号が
人混みの中を
歩きはじめる

小鳥たちが
実を啄みにきたら
風の中に
ぼっかり開いた
口腔たちが
白く笑いはじめる

広場

夜の広場に來て
俺はやつと
ビニールの覆いをとる
冷たく攪拌された空気の中で
土と埃と汗に汚れた頬を
晒し出す

自由

遊び呆けて日が暮れる
やぶれかぶれの心には
なにもない
とてつもなく広い場所で
とてつもなく多い人間の中で
俺は完全に迷子になる
とてつもない自由を捨つため

愛情

太陽

愛情を受けずに育つた者は
愛情を知らない
愛するということが
ただ黙って
ひしと包み込んでやるものだ
ということすら知らない

日は命の始原
日は命の終焉
日が生み出した命は
億兆を超え
日が焼き尽くした命は
億兆を超え

女

磁気嵐

垂れ下げた手の重みを
女は知らない
赫々と眩しい夢見の中
一気にのぼりつめた空から
ほの蒼い霧が降る

いとも簡単に
権力者たちは
国と国とのゲームを
目論んだり
ゲームに
のめり込んだりする

詩的連想以外の連想

雑踏の中で
俺は女の尻に
火をつけた

じりじり焦げていく
臭いは
あたりを
屁の中に
蹴込んだようだった

とりまく人間どもは
ろくでもない
間抜けでバカな奴らめ
と叫びよった
ところが女の

神品ともいうべき
山吹色の
観音仏が露出されると
彼らは
眼を腫り
涙を流した

彼らは
みんなそこから来た
彼女らも
みんなそこから来た

彼らがみんな
彼女らがみんな
いったん地におりるために
そして
やがて
競い合い
空につぎのぼるために
来たのだ

案の定
俺は
石打たれ
爪を剥がされ
監獄にぶち込まれた

完全調和

女もない
魂もない

物質も存在しない
時間も存在しない
空間も存在しない

嘘もない
偽りもない
宙空だとか呼ばれた
小劇場もない

存在しないことが
永劫に回帰する

神も
仏も
存在しない

見てごらん
何にもない
何にも存在しない

かつて瞬毫の間
幻の戯画が
一閃したという
気配すらない

肉体もない
欲望もない
争いもない

男もない